

Title	スピリチュアルなものへの魂の叫び
Author(s)	窪寺, 俊之
Citation	キリスト教と諸学 : 論集, Volume25 : 51-70
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=2833
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

スピリチュアルなものへの魂の叫び

窪 寺 俊 之

はじめに

創立記念日を迎えて、このような講演会に招かれて、身の引き締まる思いです。最近、日本ではスピリチュアルな問題に関心が集まっています。そこでスピリチュアルな問題とキリスト教はどのように関わっているのか考えてみようと思います。

今日の講演は四部構成になっています。そこで最初に、どのような構成になっているかをお話しします。最初は「魂の叫び」です。二番目は「スピリチュアルなもの」、三番目は「聖書のスピリチュアリティ」についてです。そして最後の四番目は、病床の中でスピリチュアリティの覚醒を経験した人の話です。

1 現代社会における孤独

現代社会の特徴は、物質的豊かさ、便利さですが、その反面非常に孤独です。最近ある人からeメールをいただきました。紹介します。

「自分は何のために生きているのかわからない。どうして生きているのかわからない。学校に行きたくないし、なぜ勉強しなくてはならないのかわからないし、学校に行ってもやることがないから家にいるけれども、家にもやる事がないので何をすればいいのかわからない。……僕は頭がおかしいでしょうか。……僕の頭は狂ってるんでしょうか。医者に診て貰わなくてはならないでしょうか。僕なんか生きていないほうがいいんです。死んだほうが楽になるからそのほうがいいんです」。

メールを読みながら心が痛みました。また、この方がどうして私のメールアドレスを知ったのかわかりません。このメールの送り手の年齢、名前、住所をまったく知りません。私はどう返事をしたらいいのか悩み、次のようにメールをしました。「私は確かにメールを受け取りました。そして、メールを読んであなたが深く悩んでいることが私自身にも伝わりました。しかし、私はどうお答えしたらいいのかわかりません。ただ、私はどんなことがあっても、あなたが生きていて欲しいと思う」と簡単に書いてメールしました。その後この方からメールはありません。

メールをしてからも私は、この方が死んでしまいたいほどに悩んで苦しんでいるという事実に関心を痛めました。自分の人生を投げ捨てたいと思うほどに人生が重たいということでしょう。自分存在がわからなくなつて苦しんでいくことでしょうか。

2 夢を持つ

この青年の悩みの原因はいくつもあるでしょう。ここでは三つだけあげようと思います。

① 悩みを聴いてくれる人がいないということです。相談して心の悩みを打ち明けて聴いてもらえる人がいれば、心は軽くなります。それができないで悩んでいるのです。つまり、孤独だということです。

② 自分の生きていく意味が見つかからないということです。この方が自分の生きていく意味がわかれば、これほどまでに悩まないでしょう。しかし、この青年はなぜ自分が生きなくてはならないのか意味が掴めないのです。自分の生きる意味を非常に強く求めているのです。それも客観的に「生きる意味は何か」というのではなくて、この私、この僕の生きる意味が知りたいのです。自分が納得できるものを見つきたいのです。

③ 将来の夢がないのです。将来、警察官になるとか、ミュージシャンになるとか、学校の教師になるとか夢があれば、多少の困難は乗り切れるのです。聖書の中に次のような言葉があります。

「老人は夢を見、若者は幻を見る」(ヨエル書二・一)

老人も若者も夢が必要なのです。艱難に直面したとき、艱難に負けずに生きるには、夢が必要です。夢は人の中

から生きる力を引き出す要因です。夢がないと忍耐して待つことも前に進むこともできません。夢がないと自暴自棄になり、絶望に襲われます。非常に残念なことですが、この青年は夢をもつことができませんでした。

現代社会は、親しい友人を作り、生きる意味を見出し、将来に夢をもつことが困難なのです。そのために、魂が息苦しく、生きることが重荷になり、将来を見失ってしまうのです。

このように魂が息苦しくなると、人はスピリチュアルなものを求めます。霊的なものに関心をもち、神秘的なものに関心をもちます。目には見えないが、何か本当のものがあるのではないかと、哲学や宗教に関心をもちます。心の深い所に届くものを求めます。「精神」よりもっと存在の根底に関わるところの問題です。自分の存在の意味や将来の希望を本当に求めるようになると、人はスピリチュアルなもの、霊的なもの、神秘的なもの、魂に関わるものを求め始めるのです。

二 金子みすゞ（一九〇三〜一九三〇）の世界

そこで次にスピリチュアリティについて説明をいたしましょう。

スピリチュアルとは、『英和大辞典』をみると、霊性、精神性、内面性などがあります。あまりわかりやすい訳語ではありません。そこで金子みすゞの詩を紹介したいと思えます。この詩がスピリチュアルとは何かを考えるヒントを与えてくれます。

金子みすゞは、山口県長門市に生まれました。幼い時から詩作の才能を発揮し、西条八十に「若き童謡詩人の巨

星」と賞賛されました。けれども夫の宮本啓喜はみずぶの才能には関心がなく、詩作を禁じました。父を三歳の時になくし、母の再婚などあつて、金子みずぶは厳しい人生を生きなくてはなりませんでした。みずぶは仏教に帰依していましたが、若くして自らのいのちを断つてしまいました。二六歳でした。今、ここに取り上げるのは「雪」という題の詩です。『さみしい王女』JULA出版局、一九八四年、新装版金子みずぶ全集・Ⅲ、一九三―一九四頁。新漢字・現代かなづかいに変更。

雪

誰も知らない野の果^はで

青い小鳥が死にました

さむいさむいくれ方に

そのなき^きがらを埋めよとて

お空は雪を撒^まきました

ふかくふかく音もなく

人は知らねど人里の

家もおともにたちました

しろいしろい被^{かつぎ}衣着て

やがてほのほのあくる朝

空はみごとに晴れました

あおくあおくうつくしく

小さいきれいなたましいの

神さまのお国へゆくみちを

ひろくひろくあげようと

この詩を読むとほのほのとした暖かい心が湧いてきます。なぜ、私たちの心が慰められ、心が優しくされるのか、その理由を考えてみたいと思います。いくつかの点を上げてみましょう。

① 青い小鳥は、誰も知らない野のはてで、死んでしまいました。食べ物がなかったのか、小鳥が病に冒されていたのか、あるいは、自然災害にあったのかわかりません。しかし、小鳥は厳しい現実の前でいのちを落としてしまいました。その状況は「さむいさむいくれ方に」という詩の言葉が、代表して現しているように厳しい現実でした。小鳥はこの宇宙に生きる場を失い、孤独のうちに死を迎えました。小鳥の苦悩が読者の心をさしてきます。

② 青い小鳥が死んだ日は、雪の降る寒い日でした。金子みすゞは「そのなきがらを埋めよとて／お空は雪を撒き

ました／ふかくふかく音もなく」と謳いましたが、深々と降る雪が、小鳥の死骸を埋め尽くしました。小鳥の姿が見えないほどに雪は積りました。しかし、小鳥の死骸を覆い隠した雪の姿の中には、「お空」の暖かい心遣いがあつたと金子みすゞの心は読み取りました。ここでの「お空」は、気象学的「空」ではなく、それ以上のものが語られています。小鳥が神様のお国へ行く道を広げる優しい心を「空」はもっていたと金子みすゞは感じました。金子みすゞは、この「空」に神的意思を感じました。人間の目には見えない天の暖かい配慮が、誰にも知られない孤独な小鳥に注がれていたと解釈したのが金子みすゞのスピリチュアルな思考法です。目に見えないものを見る感性はスピリチュアルな感性です。そのスピリチュアルな感性は、醜い死骸を真つ白な雪が覆い隠したと解釈したので、真つ白な雪はここでは暖かい温もりをもつものに変わっています。小鳥の厳しい生は「お空」の眼差しに包まれているので、寂しさから解放されています。このような視点の転換によつて新たな意味を見つけ出すのが、スピリチュアリテイの思考法です。

③ さらに、「人は知らねど人里の／家もおともにたちました／しろいしろい被衣着て」とは、小鳥の死んだ寒い日に、ある寒村の家でも葬儀があつて女性がかつぎを着て顔を隠すようにしていたといえます。小鳥が死んだ夜、同じように、愛する人を送つた人がいたのです。小鳥の寂しさを共にする人がいたことで小鳥は孤独ではなかつたのです。このような表現の中に孤独の小鳥に寄せる金子みすゞの深い優しさと思ひやりが滲み出ています。(水平の慰め)

④ 「やがてほのぼのあくる朝／空はみごとく晴れました／あおくあおくうつくしく」とありますが、「お空」の暖かい配慮は、この文章にも受け継がれています。寒いひっそりとした夜、小鳥は静かに息を引き取りましたが、次の日は見事に晴れました。それは小鳥の旅立ちを助ける「お空」の心遣いであつたと金子は見ました。単純な天候

の変化にも、金子は神的存在（「お空」）の意志を見て取りました。このような目には見えないが、小さいのちに目を注ぎ配慮している「お空」を見て取るのが、スピリチュアルな感性です。このようなスピリチュアルな感覚は、何気ない出来事にも「お空」の意志や配慮を読み取って、存在に意味づけを与え、生きる土台を与えます。

⑤ 「小さいきれいなたましいの／神さまのお国へゆくみちを／ひろくひろくあけようと」とありますが、小鳥の死を契機として、「肉体的生命」と「霊的いのち」が、明確に分けて考えられています。小鳥の生物学的生命は終わりましたが、霊的いのちは存在していることを、「小さいきれいなたましいの神様のお国へゆくみちを」という言葉の中に込めています。霊的いのちは肉体的生命が終わった後でも、消滅せずに神様の御元に引き上げられます。これはスピリチュアルな思考法です。ここで、「きれいなたましい」とは生まれたばかりの穢れのない姿がイメージされているように見えます。それは小鳥の生が出てきた根源を思い浮かべることを促しますが、それは「魂の故郷」です。魂の故郷はスピリチュアリティが示しているものです。このような生の根源こそがスピリチュアリティが関わるものであり、神さまのお国とは魂の「故郷」であってスピリチュアルな世界です。

⑥ この「神さまのお国」とは、必ずしもキリスト教の天国を意味していません。仏教に帰依した金子みすゞの意味する「神さまのお国」とは、仏教とかキリスト教という宗教的概念ではなく、むしろ、神様、仏様の暖かい意思と支配のある場所、空間こそが、ここでは重要です。金子みすゞは小鳥が大きな意思と愛の支配下に置かれたと、感じたのです。ここには、金子みすゞのスピリチュアルな感性と思考が現れています。小鳥のいのちは、今、大きな安らぎの中にあると解釈したのです。このような大きな意思や愛と力を、人間を超える垂直関係で見ることがスピリチュアリティの感性であり、思考法です。

さて、今、金子みすゞの詩を見ながら、スピリチュアルな感性とか、スピリチュアルな思考法についてふれました。これは人生の見方、理解の仕方に関わることで視点の転換です。これを少しまとめると、次のようになります。

① 垂直の関係

スピリチュアリティの感性とは、物を水平関係のみで見るとはなしに、垂直の関係で捉える感性です。水平関係は人と人との関係ですから、有限性を含められません。スピリチュアリティはこの有限性を脱却して、垂直的關係で人を見ることで、将来の希望を見出すことができます。また、スピリチュアルな思考法は、人間を超える神との関係性で思考する方法です。このような感性や思考法を人間の垂直的理解と言つてよいと思います。人間には、このような超越的な存在と信頼関係、堅い絆をもちたいという願望があります。そうすることで水平関係が崩れたり、行き詰まったときの解決の道になるのです。とくに人生の意味や目的、存在の理由など非常に個人的、実存的、宗教的問題の解決は、このような関係をもたなくては解決は相対的で本当の意味で納得できるものにはならないのです。

② 超越的なものとの関係がもたらすもの

このような超越的なものは三つの要因でできています。心理的、哲学的、宗教的要因です。その共通要因は「癒し」ということです。癒しとは、健康の回復、人間関係での和解、見失ったものへの気づきなどと言ひ換えることができます。癒しは、回復、和解、気づきなどと言ひ換えることができる訳です。癒しのもたらすものは、失われた人生の意味を回復したり、不安や恐怖に怯える心に平安与えるものだったりするのです。

③ 魂の故郷（自己回復、自己肯定、癒し）の力

スピリチュアリティが求めているものを、別の言葉で言ひ換えると、それは魂の故郷です。魂の故郷には、自己

肯定、自己回復という癒しがあります。慰め、励まし、希望の自己回復があります。スピリチュアリティには傷ついた人や死にたいと考えている人を包み囲む包容力が満ちています。呻き、叫びをあげて苦しんでいる魂を包んで、癒して、立ち上がらせる力がここにあるのです。

先ほどの青年は、このスピリチュアルな助けを求めていたと言えるでしょう。それは超越的な存在を見つけることで与えられる存在の土台や意味、また、生きる力を求めていたのです。このようなものは、私たち人間関係の有限な世界や相対的世界では本当のものが見出せないのです。本当の価値は超越的世界との関係の中で与えられるものです。

実は、このようなスピリチュアルな感性とか、思考法は日常生活でも働いているのですが、とくに、いのちの危機で覚醒するという特徴があります。それをスピリチュアリティの覚醒と呼んでいます。

三 キリスト教の世界がもたらす恵み

ここで聖書がもつスピリチュアリティについて考えてみましょう。聖書は私たちの人生をどのように見、私たちに何を与えようとしているのでしょうか。

初代教会の伝道者であるパウロの言葉に注目してみたいと思います。(ロマ五・三一―八)

「そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。」（ロマ五・三―四）

「正しい人のために死ぬ者はほとんどいません。善い人のために命を惜しまない者ならいるかもしれませぬ。

しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに對する愛を示されました。」（ロマ五・七―八）

パウロは当時のユダヤ教のエリート教育を受けて将来を嘱望された人物です。しかし、いつも心の中に眞実な生き方を求めて苦しんだ人です。自分の心を見れば見るほど、神様の意思に添えない自分がいると感じました。何とか救われたいと努力すればするほど、自分自身の弱さに気づき、とうとう、「善をなそうという意志はありませんが、それを実行できないからです……わたしはなんと惨めな人間なのでしょう」（ロマ七・一八、二四）と叫び声をあげています。そのような苦しみの中でイエス様に出会って救われた人です。パウロはこの経験の後、ユダヤ教からクリスチャンになったことで、ユダヤ教の指導者たちから憎まれ迫害されました。パウロは次のように書いています。「わたしたちは耐えられないほどひどく圧迫されて、生きる望みさえ失ってしまいました。わたしたちとしては死の宣告を受けた思いでした。」（Ⅱコリント一・八b―九a）と。パウロはこの告白にあるように、生きるのを諦めて死を覚悟したというように非常に苦難を体験した人です。

このパウロの言葉ですから、私たちにも大変興味があると思います。このパウロの言葉は、大きく二つのテーマがあります。一つは苦難は誇りであるというテーマ、もう一つは神の愛は罪人に注がれているというテーマです。

この二つのテーマは、両方とも一般的常識とは反対のことを言っている点で興味深い言葉です。そこで少し聖書の

中のパウロの言葉に注目して、パウロが言いたかったことに心を傾けてみたいと思います。

1 苦難は誇りである

苦難が誇りだというのは、不思議です。苦難はできれば避けたいことですが、パウロは「誇り」だと言います。

「そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。」(ロマ五・三―四)

この「誇り」という言葉は「喜び」とも訳されます。そう訳すると、苦難を「喜ぶ」と言った理由は何でしょうか。パウロは「苦難」を通じて「忍耐」を学ぶからだと言います。この「忍耐」というのは、苦難を我慢するという意味よりも、「不屈の精神」と訳せるところです。苦難があるから人は悩み苦しみながら少しずつ強さを身につけて「不屈の精神」を身につけることができます。人生で何でも順調に運んだら、人は本当の意味での強さを身につけずに終わり、人の痛みを理解することができない高慢な人間になってしまうでしょう。

苦難を経験した人は自分の弱さを認められる強さを持ちます。苦難を経験し自分の弱さを知った人は、自尊心という厄介なものから解放されて、弱くてもよいと言える自由を持ちます。

苦難を通じて、忍耐を身につけ、それが「練達」を生み出すと言います。「練達」は「練られた品性」、「練られた人格」です。その人の中から出てくる人格的輝きであり、温かみであり、人を心から尊敬し愛する心です。このような練達した人格は、人を慰め、生かす力をもつものです。これが人間の本当の価値です。「練られた人格」は、希

望を生み出すと言います。繰り返しやってくる苦難を経験し、人格的豊かさをもつことで、人生を肯定できるようになります。苦難の先には出口があると信じられるのです。ですから練られた人格は希望を生み出すというわけです。

これで苦難は誇りであると言った言葉の意味が少しわかりました。しかし、まだ私たちは本当にそう言えない不安をもちます。そこでパウロは苦難を誇りにできるような理由を説明します。自分の力や知恵を頼りにしてはできないが、神様の愛を受けて、神様の支えと励ましを受けて初めて可能になると言います。つまり、パウロは自分の力の限界を痛いほどよく知っていたので、神様の愛にすがると大膽に言うのです。パウロは自分の限界を正直に認める勇気のある人でした。

これが最初のテーマは、「苦難は誇り」だという点です。

今日、私たちに必要なのは、困難や苦難から逃げるのではなく、むしろ、襲ってくる苦難を迎えて立つ強さではないでしょうか。パウロが死の危険を感じながら、その中で希望をもち続けられたのは、キリストの愛に支えられて苦難を通じて自分自身が強く成長していくことを知っていたからです。

パウロは苦難は誇りだと言い、そう言えるのは、神の愛が注がれているからだと言いました。しかし、神様の愛があれば本当に強くなれるのでしょうか。そこでパウロは神様の愛がどういうものかがわかれば納得できるはずだと言います。神様の愛の凄さは私たちが考えるようなちっぽけな愛ではないと言います。では、どんな愛なのでしょう。それが次のテーマです。

2 神の愛は罪人に注がれている

二番目のテーマは、罪人のためにキリストは死んでくださったという点です。

「正しい人のために死ぬ者はほとんどいません。善い人のために命を惜しまない者ならいるかもしれませんが。しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに對する愛を示されました。」(ロマ五・七一八)

テーマは、神様の愛は罪人に注がれているという点です。罪人とは神様から離れて自分勝手に生きる人間です。神様から離れて失敗し、行き詰まり、自己嫌悪に陥る人です。パウロは、正しい人のために死ぬ人はいないと言います。正しい人の身代わりになる必要はないからです。「善い人」とは、親切な人という意味です。親切な人のためならば身代わりになって死ぬ人もいるかもしれないと言います。しかし、神様のことなど理解せず、自分勝手に生きて、遂には助けを求めるようなわがままで身勝手な人々の身代わりになる人なんていません。

実は、パウロが言いたいのは、そんな罪人を神様のほうが救いたいと願っているということです。ご自分の独り子を十字架にかけて、私たちの身代わりとなる道を選んでくださった神様がいると言うのです。神様はご自身に痛みを負って私たちを救ってくださいなのです。神様の愛はご自分が痛みを負うほどのものであると言います。ここに私たちは生きる道を見出すことができるのです。自分の努力で解決するのではなく、救いが与えられるのです。無力で自分では出口が見出せないが、しかし、神様が救いの道を開いてくださり、将来への希望を与えてくださったのです。

ここにキリスト教のスピリチュアリティがあります。神様という超越者が私たちのために痛みを負うのです。神様は自分中心でわがまま勝手な人間を救うために、ご自分の地位、立場を捨てて、私たちの所に下りてきてくださったということ。最後には十字架にかかり、私たちの身代わりとなってくださいましたのです。

ここで大切なのは、神の子イエス様という超越者が上から下に降りて来てくださった点です。腰を低くする、いのちを投げ出すことです。超越者が自らの立場、身分、特権を捨てた理由は、私たちが罪の束縛から解放されて欲しい一念からです。ここに神様の燃えるような思いと涙さがあります。

私自身もイエス様の思いに心動かされて、イエス様に従う決心をした者です。初代教会の人々から始めて、キリスト教の歴史に加えられた人は、イエス様の愛に心動かされて、このイエス様に従うと決心した人たちです。キリスト教のスピリチュアリティは神様の強い愛によって人は救われ、生かされ、喜びの人生に入れられるということです。

四 天国に旅立った老人の話

最後に人生の危機に直面して、眠っていたスピリチュアリティが覚醒し、新たな人生を歩んだ人のお話をして終わります。ここでスピリチュアリティの覚醒を経験し、その後、どのように変わったかを見たいと思います。

私は、大阪にある淀川キリスト教病院という所で病院付き牧師チャプレンという働きをした経験があります。そこにはホスピスという病棟があって、ガンの終末期の患者さんが入院されています。その患者さんの一人の男性の

ことをお話しします。この患者さんは肝臓がんの末期でした。大きな身体の方でしたが、肝臓がんに罹って骨と皮だけにやせ細ってしまいました。病状が悪化して顔もからだも黄疸が出ていて腹水が溜まりました。お腹が大きく膨らんでいました。ベッドに寝てばかりいると、身体が固くなって動けなくなり、この患者さんは立ち上がって、点滴のピンをぶら下げて歩き出しました。ベッドから立つて部屋の外に出た廊下のところで足が動かなくなつて、躓いて倒れてしまいました。患者さんのお連れ合い（夫人）と看護婦さんが身体を抱きかかえてベッドの所に運びました。私がベッドの所に行つたときには、患者さんはシーツを顔に掛けて男泣きに泣いていました。病気にはもう勝てないほどに弱りはてた患者さんは、病いを抱えた自分の人生とどう組み合うかが突きつけられていました。私が毎日患者さんの所に行っているうちに、少しずつ心を開いてくださり、信頼関係ができてきました。

ある時、患者さんが私に言いました。「聖書を読みたいのですが」と。私は少し耳を疑いました。「本当に読まれるのか」と。病院のチャプレンですから聖書を持っていき、渡しました。私は本当に読んでくださるかどうか内心疑っていました。数日後、この患者さんが「聖書って面白いですね」と言われました。私は正直、驚きました。そこで「どうして、そう思われますか」と尋ねました。するとこの患者さんは「聖書の中に喧嘩の話があるんですね」と言われました。創世記のカインとアベルの話（創世記四・一―二六）を読まれたようです。患者さんは聖書に興味をもってくださいました。そして、徐徐にキリスト教にも関心をもつようになりました。ある時、この患者さんが遠慮がちに「私でもクリスチャンになれますか」と尋ねられました。私は「あの十字架にかかったイエス様は、私の罪の身代わりとなつてくださったのです。あのイエス様を心に迎え入れれば、それでクリスチャンになれます」と答えました。この患者さんは、すぐに答えました。「私もクリスチャンになりたい」と。私はこの方の手を

とつて、目を閉じて祈りました。「主イエス様、あなたが私たちの罪をすべて背負い罪の許しを与えてくださったことを感謝いたします。あなたがこの方からの歩みを導いて養い育ててください。アーメン」。そして、次の日にベッドで洗礼式を行って、クリスチャンになりました。

ではクリスチャンになったら、神様が奇跡を行ってくださいって、健康になったでしょうか。クリスチャンになったので、病気から癒されてピンピンと元気になったでしょうか。そう上手くいきませんでした。段々黄疸が強くなり、身体は弱り、死が近づいて来たのがわかりました。ある日、この患者さんが私に言いました。「先生、いろいろお世話になりました。もう病気は治らないと思います。先生にはお世話になって、何もお返しできませんでした。私が天国に行ったら、先生のために一番いい席を用意しておきます」と言われました。私は非常に嬉しく思いました。

私が嬉しかった理由が三つあります。第一は、患者さんが自分の死について語る自由をもっていたことです。今、死を迎えようとするとき、怖い、死にたくないと呼んでいません。自分の死について語る自由が与えられていることを、私は大変嬉しく思ったのです。この自由はどこから来たのものでしょうか。それは十字架のイエス様を信じて心の中に迎え入れたときです。十字架のイエス様が自分の罪のために死んでくださったと信じたとき、患者さんは自分の過去の過ちも、現在の苦しみも痛みも、これから来る死後のこともすべてイエス様に委ねたのです。それが信仰です。信仰というのは自分の思い、不安、恐れ、望み、期待もすべて自分の手から離してイエス様の手に握っていただくことです。イエス様の愛と人格に任せ切ることです。

第二に嬉しかったことは、この患者さんは自分がどこに行くかを知っているということです。死ぬ人が死んだ後、

どこに行くのかを知っていることを私は嬉しく思いました。イエス様が待つていてくださる天国へ行くのです。それはなんと御恵みでしょう。いろいろ誤ったことを犯し、人に迷惑をかけ、ぼろぼろになった人間が天国に迎えられるのです。この患者さんは、イエス様を心から迎えたとき、自分でも天国に迎えていただけると信じたのです。それほどイエス様の十字架の愛が心に迫って来たのです。キリスト教はイエス様を救い主として心に迎え入れる宗教です。苦行をしなくては救いが無いとは言いません。難しい神学を学ばなければ心に平安が来ないとも言いません。病気の人は病気のままで救われます。仕事もなく、家もなく、誰からも見放された人も、イエス様を心に迎えるだけで神様の子として迎えられ、神様の家族に加えられます。ただ、イエス・キリストの十字架の死はわたしの罪の身代わりだと信じて、わたしは神様の子になりたいと決心するだけです。イエス様の弟子にしてくださいと心に決めれば、充分なのです。

そこがキリスト教の素晴らしさです。すべての人に開かれた宗教だから、誰でも救いを経験することができます。

天国に行ったとき、私たちはそこで再び会う喜びに与るのです。イエス様が私たちのような神様を無視した勝手者に、暖かい眼差しを注ぎ、救いの手を差し伸べてくださったことに感謝して、自分を任せるのです。

第三は、患者さんが人のことに気を配る余裕が与えられていることです。死の間際にありながら、人のことにも心を配る余裕があるのです。この余裕はどこから来たのでしょうか。神様のことなど、心にとめることさえしない者たちにも、神様のほうから心を配って救いの中に加えてくださったことを知ると、私たちの心に余裕が生まれるのです。この患者さんは、この私のことに心を割いてくださって、天国の一番いい席を用意しておきますと約束して

くださったのです。

この患者さんは、わがままで自分勝手な人で、家族を苦しめ、奥様や娘さんを泣かせた人です。自分の欲望のままに生きてきた傲慢な人です。その人が、死に直面して自分の弱さに気づかされて、神様にすがったのです。イエス様に出会うことで過去の清算ができ、未来への希望をもって死を超える世界に旅立つことができたのです。

これで私の講演は終わりです。私自身はイエス・キリストに出会って、人生が変えられた者です。生きる意味も価値も見出せず、ただ、死ぬには勇気がなくて、生きてきた者です。一九歳の時に教会に足を運び、そこでイエス・キリストに出会って、キリストに従うことに心を決めて、苦しみから解放された者です。弱い自分を負い、生きることに疲れ果てていた者ですが、イエス様に勇気と希望を与えられました。神様にすがることによって幸な人生がここにあると信じている者です。

皆様の中からイエス様の愛に心動かされてイエス様に従う事で、将来の夢を見出す方が起きるようにと願っています。どんな仕事に就いたとしても、自分の人生を使つて、神様に喜んでいただけるような夢を追いかけけるような人が生まれることを祈ります。

五 祈り

神様、今朝、あなたが建ててくださったこの聖学院大学の創立記念講演会に私たちを招いてくださいました。私

たちは、あなたの前に立ち、あなたからの声に耳を傾けて聴くことができましたことを感謝いたします。

今日まであなたの名によつて高度の教育と研究が続けられてきたことを感謝します。

どうか、今、ここで学ぶ学生、ここで働く教職員一人ひとりが、祈りを合わせて、再度、神様の前に新たな思いで立ち、あなたの言葉を聴き、受け入れ、献身し、主の栄光の現れる大学として発展できますように祈ります。あなたもそうしてくださいることを信じて、イエス・キリストの名によつて祈ります。アーメン。

(二〇〇九年十月二十八日、聖学院大学創立記念講演会)